幼小交流活動１

視点	1	ステップ	2～3	実施時期・回数	年間・４回

年長組と１年生との交流活動計画の作成・実施・改訂

【取組の実際】

（１） 本園年長組と附属小学校１年生は，年４回の幼小交流活動を実施している。毎回の計画や反省を幼小の教師で共に行っており，その際「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」を視点として子供の姿を捉えたり，幼小それぞれの教育課程や指導目標に照らし合わせたりしながら話し合ってきた。さらに，園の教育課程の見直しをするときに，幼小交流活動の反省で話題になったことも含めることで，園内の教師が学びのつながりをより意識できるようにしてきた。

（２） 下記はその一例である。

① 活動計画作り（P）

活動におけるテーマを決め，その時間のねらい（方向性）を話し合った後，本園の教育課程（Ⅷ期・５歳児）と小学校学習指導要領・生活科の記載内容を確かめながら，活動の具体的内容を考えた。（図１）

② 実際の活動（D）

「夏となかよし」というテーマで草を使った遊びをペアの友達と一緒に楽しんだ。（図２）

③ 活動の反省（C）

活動後，双方の教師が活動を振り返ったものを持ちより，検討した。その際，一人一人のエピソードをもとに，育っていることは何か語り合い，年長児と小学生の今の育ちを共に確認した。（図３）

④ 教育課程を見直す（A）

園では，月末にその月の指導計画をもとに保育を振り返り，教育課程の見直しをしている。その際，幼小交流活動の具体の姿からも，教育課程（Ⅷ期・５歳児）を振り返っている。記載内容やその時期に位置付けられている意味を再確認し，付け足す必要がありそうな内容について検討した。（図４）

（３） 「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」の活用について活動の反省をする際に，一緒に見た同じ場面を「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」を視点として振り返った。「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」の具体を，見取った子供の姿をもとに考えることで，子供達が遊びから学んでいることを共有できた。

図１

【本園の教育課程（Ⅷ期・５歳児）～一部抜粋～】

発達の過程	友達とのつながりの中で，互いに考えやイメージを出し合って，試したり工夫したりしながら，一緒に遊びを進めていくようになる時期
・友達と相談したり，協力したりしながら，共通の目的に向かって取り組む。（協同性）	

学習指導要領・生活より

第３章　生活科の内容
（６）身近な自然を活用したり，身近にあるものを使ったりするなどして遊ぶ活動を通して，遊びや生活に使う物を工夫して作ることができ，その面白さや自然の不思議さに気づくとともに，みんなと楽しみながら遊びを作り出そうとする。
遊びはそれ自体が楽しいことではあるが，そこに友達とのかかわりがあるとさらに楽しいものになる。競い合ったり力を合わせたりできるからである。遊びそれ自体が互いの関係を豊かにし，毎日の生活を充実したものにしていく。そうした豊かな生活の実現に向かう遊びを作り出していく姿が期待されている。

図２

【夏となかよし～草で遊ぼう

図３

１年担任の見取り	年長担任の見取り
・スキー山の傾斜を使い，ゴロゴロと転がる遊びを考え付いたのが面白かった。自然とのかかわりを体験しているのかなと思った。	・やわらかい草に触れるのが気持ちよく，ペアの人と一緒に寝ることで気持ちがつながったような気がする。自然とのかかわりももちろんあり，ペアの人との協同性の芽生えにもつながると思った。
・ペアの園児がケガしないように，移動中にさりげなくガードしている姿があった。安全面を考えられるという点では，道徳性・規範意識の芽生えの育ちと考えられるのではないかと思った。	・ペアの園児を気遣っての行動なので，社会生活とのかかわりともとらえられる。道徳性・規範意識の芽生えは，相手の立場に立って行動したり，自分の気持ちを調整したりしながら，決まりを作ったり守ったりすることが含まれる。

【成果と今後の展望】

（１） 成果

「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」を視点に活動の計画・実施・反省を行うことで，幼小の教師間で育ちの連続性を感じながら実践・協議し，幼小の学びをつないで理解することができた。また，本園教育課程（Ⅷ期・５歳児）を，子供の姿を根拠に見直すことにつなげることができた。

（２） 課題

今年度の成果をもとに，本園の教育課程（Ⅷ期・５歳児）を「接続」を意識して修正していく。

図４

本園教育課程（Ⅷ期・５歳

・身近な小動物の生態に関心をもってかかわったり，自分なりに気づいたことなどを図鑑で調べたりしようとしている。（自然とのかかわり）

挿入

・身近にある自然素材などを使って，遊びを工夫したり考えたりしながら，自分の興味を追求する。
（自然とのかかわり，思考力の芽生え）

（４．岩手大学教育学部附属幼稚園）

幼小交流活動２

視点	2	ステップ	3	実施時期・回数	年間・４回

就学へ向けた子供同士の交流

【取組の実際】

(1)　秋田大学教育文化学部附属幼稚園と附属小学校は長年交流・連携を図ってきた。取組の中で，ＴＴによる教員同士の授業づくりの連携より，幼児の普段の遊びや生活の流れを大切にし，子供と子供の交流が中心になるようにしたいと考えた。さらに，附属幼稚園児の減少から附属小学校への進学が減り，子供同士がまだ知り合っていない間柄である子供が多いこと，本園を知らないままに園を訪問しても直ぐ一緒に遊べないという実態を基に，今までの計画や交流の仕方を中心に見直しを図った。

(2)　子供同士の遊びを中心とした交流を設定し，徐々に幼児が小学校へ興味をもったり，期待を高めていったりすることができるように交流の内容，時期を見直し，実施している。幼児が安心して活動できるように，幼児と児童のペアを作った。活動する際は，２つのペアを合わせてグループを作り，幼児・児童共に複数が１つのグループに入るようにした。

①　１学期（４～７月）は，幼児・児童共に初めて知り合う子供が多いので，活動内容を共にすることで，徐々に親しみを持てるようにした。

本園で七夕飾りを一緒に作った。作った飾りをつなげるなどして楽しむ姿が見られた。また，幼児にとって普段生活している場所に小学生が来たことで，安心して活動ができていた。

②　２学期（８～１２月）は，低学年の子供の遊び場が幼稚園に隣接している立地条件を生かして，休み時間に自由に行き来して遊ぶ週を設け，好きな遊びの中で交流をした。

最終日には幼児が小学校に行き，１年生と一緒に給食を食べる体験をした。本園は弁当を持参しているため，子供たちにとって給食は初めてだった。緊張している様子の子供もいたが，１年生との質問タイムをきっかけとしたおしゃべりや，優しく教えてもらいながら給食の準備を進めていったことで，次第にグループの相手と打ち解け，給食を楽しむことができた。

また，１年生が交流した幼児を思い出し，生活科の時間に作ったおもちゃを園児に紹介したいと考え，一緒に遊ぶ交流をした。

③　３学期は他園から入学する子供と一緒に体験入学をする。これまで交流してきたグループの小学生と遊んだり学校を案内してもらったりする活動を通して幼児の小学校への期待を高めていく。

【成果と今後の展望】

(1)　成果

幼児が徐々に小学生に親しみをもち，普段の遊びを楽しみながら小学校との交流をすることで，自然に就学への憧れ，希望をもつことができるような交流の仕方となった。

(2)　今後の展望

幼小連携を生かし，就学後も「１０の姿」を参考に子供たちの姿を捉え，連続した子供の育ちを再考すると共に，就学前後プログラムについて引き続き小学校との間で見直しを図っていく。

（６．秋田大学教育文化学部附属幼稚園）

幼小交流活動３

視点	2	ステップ	3	実施時期・回数	１１月～３月 （交流授業　３回）

小学校への見通しがもてる交流活動へ

【取組の実際】

生活科プロジェクトメンバーを中心に小学校・幼稚園双方の教員で，単元の計画，交流の内容を考えている。相手をより深く知るとともに，特に小学生にとっては，相手の思いを受けて次の交流の内容を考えられるため，１対１のペアの方がよいと考えペアを作った。また，回を重ねるごとに繰り返し関われると共に内容の深まりがもてるようにしている。

１回目：幼稚園での遊び　２回目：小学校での活動（１回目）
３回目：小学校での活動（２回目）＋国語の授業体験＋交流給食

(1)　幼児も目的意識をもって交流できるようにする

小学校の生活を自分達なりにイメージし，楽しみなこと，心配なことを出し合った。これまで，具体的に不安を聞き出すということはしたことがなかったが，小学生になった自分をより具体的にイメージすることができたと感じる。小学生は，「幼稚園児の不安な気持ちを少なくするために」という目的意識をもち，活動を考えることとした。園児も交流を通して自分達の不安をなくせるように，小学生と仲良くなったり，小学校の様子を知ったり，心配なことを自分で聞いたりできるよう目的意識をもって交流できるようにした。

(2)　小学生とのお話タイムで心配なことを質問する

幼稚園で自分達の遊びを小学生も一緒にするとともに，お話タイムを作って，不安なことを質問できる時間を作った。「給食，全部食べられなかったらどうしよう」と質問したら，「食べられる分だけで大丈夫だよ」と教えてくれた，「バスに乗り遅れたらどうしよう」と質問したら「次のバスを待ってれば大丈夫」と教えてくれたなど，自分なりに質問し，不安を解消している様子が見られた。そのことを友達に誇らしげに伝えるなど，交流に積極的に参加する姿が多くなった。

(3)　主体的に小学生との活動に関わる（やりとりしながら活動を考える）

「次は勉強教えてほしい」「お絵かきをしたい」などリクエストしていた園児もいて，それを受け小学生は準備することができた。漢字ドリルを見て，１年生が書き順を丁寧に教えてくれる様子もあった。また，前回できなかった遊びをしたり，行けなかった場所に行ったりするグループもあった。小学校での具体的イメージがもてたことで，具体的にやってみたいこと，教えてほしいこと，行ってみたい場所や先生など自分の思いが生まれたのである。小学生との活動に主体的にかかわることができ，小学生と仲良くなった，小学校で会うのが楽しみになった，心配なことが減った，早く図書館で本を借りたい，漢字を習いたい，など小学校に向けて楽しみなことが見つかったり，不安が解消されたりした。

【成果と今後の展望】

(1)　成果

小学生の課題意識と園児の目的意識の方向性を双方向に考慮したことが，幼稚園児にとっては，小学校生活を具体的にイメージしながら交流する姿につながった。これまで幼稚園内での生活の中では見通しをもって生活できるようになった子供たちであったが，生活や場の変化などをイメージし，小学校への見通しをもつ手がかりとなった。また，段階を踏んだ交流の計画にしたこと，ペアを作り，何度も繰り返し関われるようにしたことで，小学生に親近感をもち，仲良くなることができ，活動にも主体的に関わり，積極的に小学生と対話しながら活動する姿につながったのだと考えられる。小学校教員と幼稚園教員が共に「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」の視点で子供たちの成長を捉えることで，子供たちの実態に即した単元の流れや活動内容となった。

(2)　今後の展望

今後さらに園児の興味・関心を探ることにより，学びが深まっていけるようにしていきたい。また，来年度，この年長組の子供たちが１年生として実践するとき，自分達のことと重ねて考えていけるようにしていくことが大切ではないかと考える。

（10. 宇都宮大学教育学部附属幼稚園）

幼小交流活動４

視点	3	ステップ	2	実施時期・回数	年間４回

交流活動における小学校教員との連携

【取組の実際】

本園では，小学校４年生と４歳児が交流活動を下図の通り年間４回実施している。実施するに当たっては活動の充実を図るため，４学年の担任と４歳児の担任が活動の具体的計画の立案から事後の振り返りまでを共に行っている。

時　期	交流活動 「 」は活動のテーマ	教師の協議の機会
５月 ６月	第１回 「仲良くなろう」	計画① 振り返り②
７月	第２回 「もっと仲良くなろう」	計画③ 振り返り④
９月 １０月	第３回 「ミニ運動会で力を合わせよう」	計画⑤ 振り返り⑥
１月 ２月	第４回「未定」	計画予定⑦ 次年度へ⑧

①幼・小の教員が共にそれぞれの子供の育ちや姿を話し合った。児童があらかじめ交流会でどんなことをしたいか話し合った内容を基に，よりよい活動に向け意見を交わした。特に幼稚園教員は，幼児の発達やゲームへの理解において個人差があることを具体的に伝えた。

②全体で行った活動は，幼児にとって難易度の高いものであるとともに，児童間での共通理解が図られておらず，計画したことを実現するまでに至らなかった。しかし，幼児と児童が触れ合うことで，互いのことをもっと知りたいという気持ちが芽生えた。

③幼児の好きな遊びを児童と一緒にすることで，さらに仲良くなれるのではないかと考え，計画した。

④自分の遊びの楽しさを児童と共有したことを喜び，安心感が芽生えたことにより，幼児から積極的に関わろうとする姿が見られるようになった。会の最後に，お互いに活動を振り返る時間を設けたことで言葉による伝え合いができた。

⑤活動日が、運動会を終えて間もない時期であったため，運動会の余韻にひたりながら，一緒に体を動かすことができるような内容で活動を計画した。

⑥児童が作った競技があることで，憧れの気持ちや活動への意欲が高まった。一緒に体を動かすことで，普段では見られにくい多様な動きを引き出すことができた。

⑦まとめとして経験して欲しい内容を含めて計画する。
⑧振り返りをして改善策を具体的に話し合い，次年度に生かせるようにする。

【成果と今後の展望】

(1)　成果

具体的な学習・保育の内容を幼・小の担任同士で摺り合わせて活動を構成していくことで，互いの教育観や子供観を知ることができた。また、交流活動の実施に際し，その都度計画や振り返りをする場を設け，話し合いを重ねたことにより，幼・小の教員のよりよい関係性を構築することができた。

(2)　今後の展望

幼・小の教育課程の接続に向け，交流活動以外の場でも，ここで築いた関係性を双方の教育内容や子供の発達の理解など具体的な活動に生かしていく。

（12. 埼玉大学教育学部附属幼稚園）

幼小交流活動５

視点	2	ステップ	2～3	実施時期・回数	不定期・１回

機を捉え，環境面で配慮する交流

【取組の実際】

(1)　お茶の水女子大学附属幼稚園では，平成１３年度より３年間の幼小連携，平成１７年度から３年間の幼小中連携研究に取り組んできた。附属４校園（幼小中高）が共通の「教育の柱」「研究の柱」を掲げて，毎年４校園の研究実践の概要をＡ４版１枚にしたポンチ絵を作成している。幼稚園では，園を取り巻く様々な連携の一つとして幼小連携を位置づけている。

(2)　平成１３年度から取り組んだ幼小連携研究で接続期を設定し，小学校ではスタートカリキュラムに先行して，入学後の教育課程を工夫してきた。

(3)　現在行っている交流の概要は，次の通りである

①　「わくわく広場」（小学校校庭と幼稚園園庭をつなぐスペース）を介しての交流

・小学校の休み時間を中心に，小学生のボールゲームや，一輪車を得意げにこぐのを幼稚園児があこがれの眼差しで見る，小学生が園庭を覗いて幼稚園の頃の担任に声をかけたりするやり取りが日常的にある。

・小学校の運動会の前後には，音楽が聞こえ，元気に練習する姿を，幼稚園児が見ている。時には門を出て「わくわく広場」まで行き，見せてもらっている。

②　２学期終業時の「影絵」観賞招待

幼稚園では２学期終業式で，教員が演じる影絵を子供と保護者に見せている。同じ演目を小学校１年生，帰国学級の生徒を招待して観賞する機会を長年設け続けている。園舎の玄関口に飾る大きなもみの木のツリーを小学生が見て，幼稚園の生活を味わう機会になっている。（こども園に向けても同様の機会を持っている）

③　機会を捉えての行き来

小学校の給食時間に校庭へ出かけ，幼稚園児が手作りのたこを揚げたり，思い切りかけっこをしたりする。もちつきに気づいて見ている小学生を招くなど，自然な交流の機会をもっている。

…トピック資料２

【成果と今後の展望】

(1)　成果

子供の気付きから始まる交流は小学校教諭と幼稚園教諭の連携，柔軟な対応なしには成立しない。連携は双方がそれぞれに主体性を持ちながら協力することであり，幼小の教師が相互の生活，実態に興味関心を持ち，生活がつながり重なり合う交流を実現することで，子供たちの連携が生まれ，自分の生活と相手の生活をつなげた気付きや学びが生まれる。

(2)　今後の展望

接続期の設定後，時間が経過する中で，幼・小それぞれに教育課程の再編成を進めている。以前の幼小連携研究で築いた関係を基盤にお互いの教育観に目を向け，取り入れ，新たな交流の可能性を探りつつ，今後の双方の教育課程に反映していきたい。

（15. お茶の水女子大学附属幼稚園）

幼小交流活動６

視点	①	ステップ	２～３	実施時期・回数	１０月～１１月１回

互恵的で持続可能な幼小交流活動

【取組の実際】

(1)　幼小交流活動における課題として，「幼児と児童が共に主体的に取り組むことができる活動」「幼小の教員の打ち合わせ時間の確保」「次年度への継続」があげられる。そこで，幼児と児童が共に主体的に取り組むことができ，且つ毎年持続可能な幼小交流活動の在り方の模索として，１年生生活科の単元「あきのものであそぼう」において次のような取組を行った。

(2)　まず，１回目の交流活動を，秋の自然物で作ったもので遊ぶ場面で行った。その際，今まで互いに遊びや授業で作ってきたものを持ち寄ってお店ごっこを行った。そうすることで，幼児が単にお客さんとして遊びにいく活動とは違い自分たちも店を出すため，主体的にお店ごっこを行うことができた。次に，それぞれで振り返りを行った後，互いの振り返りを共有する場を設けた。１年生は自分たちとしては満足いく結果であったため，肯定的な意見が多かった。しかし，年長児からは「どこにどんな店があるか分からなかった」「やり方が分からないから行かなかった」など否定的な意見もあがった。年長児の意見を聞き，１年生から「直してもう一回やりたい」という意見が多くあがり，２回目のお店ごっこを行うことにした。幼小の教師は打ち合わせで２回目のお店ごっこを行う計画をしていたのだが，１年生と年長児には知らせていなかった。そうすることで，１年生が必要感をもって，自分たちから「もう１回やりたい！」という思いを引き出すことができると考えたためである。振り返りを共有した後すぐに，それぞれの店を作りなおす時間を設けた。１年生に，年長児に試してもらって改善点を考えようとしたり，「どこが分からなかった？」と直接質問に行ったりする姿が見られた。年長児と同じドングリ転がしを作っていた１年生から，互いのコースを合体させないかと持ち掛け，年長児と１年生が一緒に行うことになった店もあった。別の日に２回目のお店ごっこを行い，その振り返りでは多くの１年生が満足し達成感を感じていたことが分かった。

(3)　「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」の活用について

小学校教員との活動前の打ち合わせ，１回目の活動を終えた後の振り返り，活動最後の振り返りにおいて，１年生の様子，年長児の様子を「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」の視点から振り返った。共通の視点をもって振り返りを行うことで，幼児期に遊びを通して育つ力について共有することができた。

【成果と今後の展望】

(1)　成果

「互いに持ち寄る」「お店ごっこは１回と伝えておく」「２回お店ごっこができるよう設定する」という方法により，幼児が主体的に取り組むことができ，１年生も必要感と達成感のある活動となった。教員間の打ち合わせの時間も従来より減らすことができた。

(2)　今後の展望

同じ方法を用いて他の単元での交流活動に取り組んでいくことで，この方法の有効性を確認し，改善点を探っていきたいと考えている。

（19. 金沢大学人間社会学域学校教育学類附属幼稚園）

幼小交流活動７

視点	1	ステップ	4	実施時期・回数	４月下旬～５月上旬 ２回

交流活動「幼稚園で一緒に遊ぼう」
～入学したばかりの１年生を幼稚園に招く～

【取組の実際】

(1)　本園の交流活動の特徴

本園では，年４回のべ６日間の交流活動を実施している。時期ごとに活動のねらいを明確にし，幼小の円滑な接続を促している。（トピック資料参照）

中でも，小学校へ入学した直後の４月下旬から５月の連休の時期に合わせて行う交流活動は，幼稚園を会場にし，主として小学１年生になったばかりの子供の学校生活への適応を目的として行っており，本園独自の接続プログラムである。

(2)　交流活動の時期とねらい

時　期	４月下旬～５月上旬（２日間）　※連休の間の登校日などが望ましい
小学生のねらい	これまで親しんできた幼稚園を会場にして，自由な遊びを中心に交流を行うことで，入学時の不安や緊張を軽減する。
幼児のねらい	先月まで一緒に生活していた子供が小学１年生となって来園する姿を見て，小学生への憧れをもつ。

(3)　実践事例「幼稚園で一緒に遊ぼう」（４月下旬～５月上旬）

小学校という新たな環境に戸惑いを感じていた修了児Ａは，母親や小学校担任の話によると，小学校入学後，腹痛や頭痛を訴えるなど体調にも影響が出ているとのことであった。しかし，３月まで過ごした附属幼稚園での交流活動をとても楽しみにしていた。交流活動当日，Ａは幼稚園の頃に親しんだ砂場遊びや固定遊具遊びなど，お気に入りの遊びを楽しんだ。幼稚園の元担任が言葉をかけると，Ａは「幼稚園は全部楽しかった」とこの日の活動を振り返った。

Ａは入学後，休み時間を一人で過ごしたり，担任の近くで給食を食べるなど，小学校という新たな環境になじめずにいた。しかし，この交流活動後は生活グループの仲間と一緒に給食を食べるようになり，友達と過ごす時間も増えたそうだ。これまで親しんできた附属幼稚園という環境の中で遊んだことが，Ａの新たな活力になったと捉えている。

入学後１ヶ月くらい経ってからの交流活動は，１年生が自己の成長を感じたり，新たな小学校という環境に対して感じている不安を軽減できたりする機会となっている。また他園の修了児にとっては，これまでに経験しなかった遊びを存分に楽しむ機会となっており，附属小学校低学年独自の教育課程である「総合単元活動」に生かされていく。

（22. 上越教育大学附属幼稚園）

幼小交流活動８

視点	3	ステップ	2	実施時期・回数	４～１２月・２８回

生活科の交流授業を通して，小学校教員と学び合う（カンファレンスと実践記録）

【取組の実際】

(1)　愛知教育大学附属幼稚園では，年長児と１年生の交流活動を行っている。例年，１年生との交流活動では，小学校の園庭で一緒に遊んだり，授業体験や学校探検を行ったりしている。しかし，昨年度末に小学校教諭と共に次年度の計画を立てる際，３学期に交流の機会が集中するため，十分な活動ができていないのではないかという意見が出た。また，カンファレンスだけでは、互いの教育活動が伝わりにくいように感じることがあった。そこで，幼稚園と小学校教師とのカンファレンスの機会を増やし，互いの教育活動への理解を深めるとともに，交流活動の見直しを行うことにした。

(2)　下記は，今年度のカンファレンスと交流活動の流れである。

①　昨年度末のカンファレンスを基に，今年度年長組担任と１年生担任で今年度の年間を通した活動について話し合い，２学期中旬頃から子供同士の継続した活動を行っていくことを決めた。また，互いの教育活動の理解を深めるために，通常のカンファレンスに加え，小学校で行われている生活科部会に参加したり，実際に互いの授業や保育を参観したりした。理解を深め合うことで，２学期からの交流活動をより質の高いものにしたいと考えた。

11.13	幼稚園	第２回交流		○　交流の様子を写真や動画で収めておく。
11.14 ２組 公開授業	小学校		○　交流の振り返り ・　めあては達成できたか ・　遊びはどうだったか ・　うまく関われたか	
11.15～ 11.28			○　次回交流へ向けた話し合い。 ・　遊びについて ・　関わり方について	○　遊びをいろいろと試しながら、話し合う。 ○　なかよしタイムなどにプチ交流できるとよい。
11.29	幼稚園	第３回交流		○　交流の様子を写真や動画で収めておく。
３組	小学校		○　活動の振り返り	○　写真、動画、プリントなどから振り返る。
12.10	未定	１年全クラスと幼稚園で交流		

授業計画例

②　①のような担任間の交流を行った上で，７月から２学期以降の詳しい計画を決めるカンファレンスを複数回行った。活動を通してのねらいを基に，互いの目指す教育活動の方向性を話し合い，生活科の授業と幼稚園の遊びを連携させた継続した３回の交流授業計画を立てた。交流授業では，小学生が幼稚園に来て，幼稚園児が行っている遊びの仲間となって一緒に遊び，楽しんだり互いに関わり方を考えたりして，共に自分の力を発揮し，育ち合いたいと考えた。

カンファレンスの様子

③　１０月後半から３回の交流授業を行った。交流のたびに，幼小各クラスで子供と活動の振り返りをし，それを基に担任間で子供たちの育ちや，経験させたいことを話し合ったことで，次の活動に生かすことができた。また，２回目の交流授業の翌日，小学校の生活科で，子供が振り返りを行う様子を地域に授業公開した。

④　全３回の交流授業後，活動を通した反省や今後の教育活動の再考を行った。

【成果と今後の展望】

(1)　成果

①　互いの保育や授業を参観し合ったことで，子供の実態や育ちを明確に知ることができた。

②　幼稚園で行った活動の振り返りの保育記録に「幼児期の終わりまでに育ってほしい１０の姿」を記載し，共有したことで，幼児の実態や育てたい姿を小学校教諭に知らせることができた。その中で，幼稚園の遊びを通した学びが小学校の生活科につながっていることを確認し合うことができた。

(2)　今後の展望

①　今回は，子供から出た意見や考えを担任間のカンファレンスで伝え合うことが主となった。子供が振り返りをして気付いたことや伝えたいことを、年長児と１年生が直接伝えられるような計画を立てていく。

②　交流活動やカンファレンスでの密な話し合いを通して，教育活動を再考することができたので，小学校教師と共に今後の教育活動や教育課程の見直しを図っていく。

（24. 愛知教育大学附属幼稚園）

幼小交流活動９

視点	1	ステップ	2～3	実施時期・回数	年間・１５回

小学校との継続的な交流

【取組の実際】

(1)　大阪教育大学附属平野５校園では，共同研究を行っており，平成30年度より「一人一人の多様な可能性を広げる評価の在り方～主体性を育むための教育目標及び評価指標の作成と活用を目指して～」という研究テーマで研究を進めている。

(2)　小学校教師との連携・交流について

①　幼稚園、小学校それぞれの生活の場で好きな遊びをするという交流をする中での幼児・児童たちの姿から，年間を通してどのような関わりを大切にしていくかを探った。

②　①を受けながら，交流の内容を幼児が児童に何かをしてもらうのではなく，一緒に活動する中で育ち合えるものとなるようにした。それぞれの生活の中の共通項を探ったところ，遠足で行った「大阪城」が同じであった。５歳児と１年生が一緒に遊びをつくりあげていけるような活動にしたいという願いから，２学期には継続的に「お城をつくろう」という活動をした。小学校教師と同じ場面を見ることによって，互いの捉え方を知ることができ，活動のねらい，内容，それぞれの学びについて，話し合いを重ねた。

③　②を受けて，３学期には，幼児が小学校について知りたいことを１年生に聞き，１年生が絵や文章でかき教えた。５歳児にとっては，小学校入学への期待感や１年生への憧れをもつことにつながり，１年生にとっては，自分の知っていることを伝えることにより，下級生へ心を寄せることにつながった。幼児，児童それぞれにとって，学びを深められるような場をつくった。

④　①②③を受け，５歳児Ⅳ期から１年生Ⅰ期にかけての幼児・児童の姿について話し合って理解を深めながら，教育課程を小学校教師と共に作成した。（図１）

(3)　「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」の活用について

期ごとに年齢別，７つの項目に（５領域を基にした本園独自の視点）幼児の姿をまとめながら，「幼児期の終わりまでに育ってほしい１０の姿」のどの姿につながるのかを検討した。また，小学校教師と１年生の姿を話し合い，幼児期の姿から現在の姿へつながっている姿についても共有した。（図２）

図１

図２

【成果と今後の展望】

(1)　成果

本園の教育課程（保育の手帳）をもとに，小学校教師との話し合いをすることで，幼児期にどのようなことを大切にしているのかや小学校入学当初の１年生の姿とのつながりについて，話し合いをすることができた。実態を交えながら，より明確に共有することができた。

(2)　今後の展望

教師の入れ替わりも激しい中で，連携の引継ぎをすることができるように，小学校教育を見通した教育課程の編成と，小学校教師との共有を図っていく。

（28. 大阪教育大学附属幼稚園）

幼小交流活動 10

視点	2	ステップ	2	実施時期・回数	年間（月１回または年１回～２回）

小学校（子供・教員）との交流活動

【取組の実際】

(1) 本園は，東広島市立吉川小学校の児童（１年生・２年生）と年長児の交流活動を計画案（図１）を基に行っている。１回目の活動の双方のねらいは，以下の通りである。

・交流活動を通して，学生と一緒に触れ合って遊ぶ楽しさを感じる。（幼稚園）

・幼稚園の友達に秋の物を使ったおもちゃや動くおもちゃを紹介し，親切に教えたりなかよく遊んだりして，緒に遊ぶことで，人との関わりを深めることができる。（小学校）

第１回目は吉川小学校の児童が本園に来訪し，「おもちゃまつり」と称して児童作成の手作りおもちゃを通してのふれあい活動を設けるようにしている（図２）。

(2) 吉川小学校の研究授業（生活科等）や研究協議会に，本園教師が参加し，小学校の取組を学んだり，本園を卒園した児童の様子を参観したりしている（図２）。また，県内の小学校教師（主に低学年）が本園の保育を参観する機会を３回に分けて実施し，小学校の教師が幼稚園教育について学ぶ場となったり，１年生たちが幼稚園でどのような生活を送って来たのかを知ったりする機会を設けるようにしている。保育を参観した後，アンケートをとるようにし（図３ アンケートの結果），結果を今後の保育に生かすようにしている。

「おもちゃまつり」について

1. 日時　令和元年12月20日(　)　9：30～12：30

2. 参加児童　吉川小学校　1年（7人）　2年（7人）
広島大学附属幼稚園　そら組さん（　人）
引田君・高橋・大石・中谷

3. ねらい　【小学校】
・幼稚園の友だちに秋の物を使ったおもちゃや動くおもちゃを紹介し，親切に教えたりなかよく遊んだりして，緒に遊ぶことで，人との中のかかわりを深めることができる。
・身近な自然に親しみ，手触りを感じることができる。
【幼稚園】
・秋の物を使ったおもちゃや動くおもちゃで遊ぶことを通して，小学生との交流を深める。

4. コース
1年生（秋のおもちゃ）　1　アクセサリー・ネックレス作り：お絵・手形
2　おみくじ：貝あき・音当
3　どんぐりでペン遊ぶんごっこ：お絵・貝殻・糸通
2年生　4　木鶏作：色あ・切る・ハ貼
5　まつぼっくりけんだま：貝殻飾・雪遊
6　どんぐりでまと：紙飾・飾る

5. 準備物（小学校）
名札（ひらがな）　カメラ　スタンプラリーシート　シール　交換で使うもの

6. 当日プログラム
9：15　広島大学附属幼稚園集合・受付
9：30　「おもちゃまつり・はじめの会」
1　はじめの言葉
2　自己紹介
3　ゲーム（2人組等同本　や　2年生がいるのでルールはかなり簡単なゲーム）
4　ルール説明
4　先生の話（連絡）
9：45　「おもちゃまつり」スタート！
1つのコースを10分ずつ遊ぶ。
・遊びの時間　→　一緒に遊ぶ　→　景品がはったら，カードにシールを貼ってもらう
次の場所に移動
全コース回遊し終わったら，園児さんが時の動けできるように合図しておきます。
10：45　片付け・トイレ休憩・お菓子配
11：00　「おもちゃまつり・終わりの会」
1　振り返り（幼稚園児・1年生・2年生）
2　幼稚園の先生の話（　先生）
3　おわりの言葉
11：30　お弁当タイム（園内）
天気がよければ園庭に，雨で園内でとどまることも多いです。
12：15　片づけ・トイレ・休憩　　12：30　幼稚園出発

図１ 交流活動の計画案

図２ 交流活動の様子

【成果と今後の展望】

(1) 成果

1) 年長児と児童の交流活動について

年長児（交流後の子供の声より）
「おもちゃで遊ぶ時，どうやって遊ぶかわからなくて，１年生さんがやり方を教えてくれてやさしかった」

年長児が，小学生とかかわることを楽しみながらも，１年生，２年生のやさしさを感じていた。

児童（日記より）
今日，広大附属幼稚園に行きました。ぼくは，まと入れグループでした。いろんな子供たちとあそべてうれしかったです。

2) 教師の同士の交流について

①幼稚園教師（感想より）

小学校の授業を参観し，幼稚園教育で大事にしていることと，生活科で大事にしていることは相通ずるものがあることがわかった。年１回の協議会の参加にとどまらず，今後は，円滑な接続に向け，幼稚園と小学校の教師が，互いの保育，授業の実際や取組について議論を重ねていきたいと感じた。

②小学校教師（アンケート結果より）

幼稚園と小学校では，時間の流れが異なることを改めて感じた。そのため，小学校では時間に追われて先生が子供に指示を出し，素早く片付けられるように促すが，幼稚園のように待つことも必要だと思った。

幼稚園と小学校では時間の流れが異なることを改めて感じた。そのため，小学校では時間に追われて先生が子供に指示を出し，素早く片付けられるように促すが，幼稚園のように待つことも必要であると思った。子供達が自ら気づいに気付くのを待ったり，子供達同士でトラブルを解決したりするのも，教師側が慌てて待つことも子供が主体的に発見したり，活動することにつながると感じた。小学校ではならないといけないことが多く，ゆとりがないのでもうかしゆとりの時間がある工夫わりかた変えていけると思う。

図３ 小学校教師によるアンケートの結果（抜粋）

幼稚園の教師にとっては，改めて接続の重要性を実感し，前向きに取り組む姿勢を見せていることや，小学校の教師は，幼稚園教育を理解し，授業や学校生活に取り入れたい，という意向を示すなど，互いに学びや参考になることがあったことが窺えた。

(2) 今後の展望

吉川小学校，本園，共に「持続可能な開発のための教育」に関する研究をしているため，子供同士の交流も含め，教師同士の交流を活発化させ，教育課程や指導計画の接続に役立てていきたい。

（36. 広島大学附属幼稚園）

幼小交流活動 11

視点	3	ステップ	4	実施時期・回数	２１回

幼小交流における『小学校体験』の改善

【取組の実際】

(1)　交流活動の内容と改善ついて

本園の年長児と附属小学校の２年生は年間を通して幼小連携を計画的に行っている。交流学年を２年生としたのは，まだ入学まもない１年生にとって、まず小学校での生活に慣れ，小学校生活を充実させていくことが大切だという考えからだ。内容については野菜を共に育て食したり，秋探しに行き遊んだりする中で互いの教育内容の充実を図ってきた。また，３学期の小学校体験（資料①）では，小学校が教室を一つ開放し，そこで年長児が３日間過ごす中で，小学校の授業を参観したり，次年度ペアになる５年生と交流活動を行ったりしている。ただ，小学校に入学したときに，最初の不安を感じる人が少なくない。進学の段差自体を無くすのは困難だが，少しでもそれを低くしたり，嬉しく感じ乗り越えていこうとする気持ちになれるように，小学校体験を工夫できないかと考えた。スタートカリキュラムと連動するアプローチにあたる園側のカリキュラムの工夫である。まず，小学校体験における授業内容について，例年小学生の授業に共に参加させてもらう形が多かったのだが，そこに互いの教育のねらいを達成できるように，一から共に作ることにした。また小学校教諭による教科指導体験を組み込むと共に，その前時に幼稚園教諭（小学校教諭免許保持）が授業を行った。さらに事前・事後の話し合いの充実を図ることで，互いの教育で大切にしていることや、子供の見取り方などを共有することができた。また初めての取り組みとして小学校体験の日程に小学校入学周知会も組み込み，１年生から同じクラスになる人と交流する機会も取り入れた。

(2)　改善した活動の実際

①幼稚園教諭と小学校教諭による小学校での授業体験

これまで，小学校の教諭による授業は行ったことはあるが，今回はスタートカリキュラムとの連動と，小学校進学への自信や期待感へ繋ぎたいというねらいがあった。そこで，小学校教諭が授業をする前に，高学年の授業を参観。その後，現担任の幼稚園教諭が授業を実施した。年長児一人一人を理解した上で，子供たちが先ほど見た『小学校の授業』を実施することで，子供たちが安心して自分の思いを表出したり，考えを発表することができ，次の時間の小学校教諭による授業でも自信を持って発表する姿があった。（資料②）

②事前事後の話合い・スタートカリキュラムへの接続

事前の話合いはもちろん，事後の振り返りの時間を２段階で取った。まず，授業をした幼稚園と小学校の教諭での振り返り（資料③）を行い園児の様子や，互いの見取りを共有した。さらに，スタートカリキュラムの共同研修会で，上記した授業の録画映像と，事前に幼稚園で録画した幼児の泥遊びの映像を元に，幼稚園と小学校職員全員で見て振り返った。園での子供たちの様子から，それぞれの見取った「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」を書き出し，見取りの相違点を話し合ったり，小学校の授業での子供たちの表出とそれに対する教諭の言葉かけについて話し合ったりした。さらにその研修の後半では，そこで学んだことや具体的な子どもたちのイメージを活かしながらスタートカリキュラムの１コマの授業の細案を幼稚園と小学校の教諭で共に作成した。

【成果と今後の展望】

(1)　成果：小学校体験が充実することで，その後の園生活も充実していく姿があった。小学校で体験したことが遊びの中で広がったり，不安感よりも楽しみな気持ちの表出が多くあった。また事後の話合いで作成した指導案が本年度の４月に実際に実施されたとや，幼稚園教諭が入園後から定期的に参観に行き，子供の様子の見取りを伝え合ったことで次の日の環境改善が行われる等，子供たちの小学校生活のスタートの充実が図られた。

(2)　今後の展望：小学校体験や合同研修会で幼児の学びを全職員と共有していくことの継続。

（40. 香川大学教育学部附属幼稚園）

幼小交流活動 12

視点	3	ステップ	3	実施時期・回数	年間・約１１回

幼・小による交流活動

【取組の実際】

子供と教師が共に学び合う互恵的な交流を目指し，年間を通して５歳児と１年生の交流活動を計画し，意図的・計画的に実施している。また，幼稚園と小学校が同じ敷地内になるという立地条件を生かし，日々の生活の中で偶然生まれる交流の姿も大切にしている。子供たちの意識の流れを大切にし，「やってみたい」という思いから生まれる活動になるよう努めている。

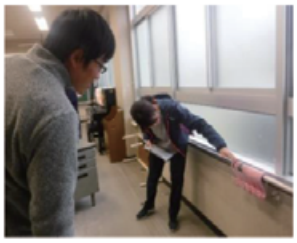
(1)　幼・小交流活動計画

活動計画を立てるにあたり，まず幼稚園・小学校の教員が互いに顔を合わせ，子供の様子や実態を伝え合うことからスタートしている。ざっくばらんに話し合う中で，お互い子供の姿が見えてくる。その姿を念頭に，交流活動へのイメージが広がり，活動を通して，それぞれの子供がどのような姿へと成長するか，成長してほしいかを出し合う。それを踏まえた上で，保育や授業の内容やねらいを伝え合い，交流活動計画を立てていく。

(2)　幼・小交流活動における援助・指導の重点化

交流をする上で，機に応じた適切な援助・指導は子供たちの意欲を持続させ，深い学びへつなげるためにも重要である。幼小の教員で，保育・授業後の振り返りをもとに話し合い，援助・指導の重点化を図り，それをまとめ共有している。共に話し合いまとめたことで，それぞれの子供の発達が分かり，自信をもって言葉掛けをする姿が見られた。

図１



(3)　教師間の連携

互恵性のある交流活動を目指して，教師間の情報交換の充実に努めている。次のことを特に大切に考えている。

・交流の前後だけでなく日常的に教師同士が行き来できる関係性を築く。
・気付いたことは後でまとめて，ではなく，なるべくその場でタイムリーに伝え合う。
・幼稚園教員が１年生の，小学校教師が５歳児の名前を呼んでかかわるようにし，子供の安心・安定につなげる。
・小学校の環境を見合い，意見を交流し，共に環境を構成する。　図１

(4)　連携を生かした評価

幼・小それぞれの教師が子供の姿を見取り，まとめた重点ポイントを基に援助・指導を行った。幼稚園教員は小学生にも，小学校教員は幼児にも援助・指導にあたり，機を捉えた言葉掛けや関わりに努めた。５歳児にとって，小学校教員から直接言葉を掛けてもらうことが喜びとなり，自信につながっている。事後には交流で得た刺激を喜び遊びに生かす姿も見られた。１年生は，振り返りカードや絵日記で学びの足跡を残している。これらに幼稚園教員もコメントを書き加え，幼稚園の目線から子供の学びを意味づけたり価値づけたりするよう努めた。小学生にとっては大きな励みとなっている。これらの取組は，子供をより多面的，多角的に理解することにつながり，援助・指導に生きる評価へとつながっている。

【成果と今後の展望】

(1)　成果

・幼・小の教員が同じ意識をもち，子供たちを共に育てていこうとする関係作りや接続部の組織が定着し，互いに学び合うことで，保育・授業の質向上につながっている。

(2)　今後の展望

・転勤等で教員の入れ替わりがあっても，４月にスムーズなスタートが切れるよう，接続期における互いのカリキュラムのつながりが見え，運用につながる指導計画を作成する必要がある。

（41. 愛媛大学教育学部附属幼稚園）

幼小交流活動 13

視点	3	ステップ	2	実施時期・回数	年間・４回

交流活動

【取組の実際】

幼稚園から小学校へ円滑な接続となるよう、年間を通して交流活動を行っている。下記は、その中の一例「秋に行った交流活動“あきのたからものをみつけよう”」である。

(1) 事前打ち合わせ

幼小の教員が子供の育ちを共有し、子供たちにとってよりよい活動となるよう、事前打ち合わせを行った。小学校からは幼小接続の担当教員と１年担任、幼稚園からは副園長と年長担任が参加した。ここでは、小学校と幼稚園がどんなねらいをもって交流を行うのか、そのねらいを達成するためにどんな活動がよいのか、どんな流れで行うのかなどを話し合った。

図１

(2) 交流当日（１１月２１日）

附属小学校１年Ｂ組（３５名）と附属幼稚園年長組（３３名）とが幼稚園で交流を行った。気持ちをほぐすために幼稚園教員が手遊びをした後、園児と児童が混ざった６～７名のグループごとに自己紹介を行った。

秋探しの説明は、園児も児童もどの先生にも関わりやすくなるよう、小学校教員と幼稚園教員が分担して行った。グループごとに園庭へ探検に出かけた時には、教員もそれぞれのグループの興味に寄り添いながら言葉がけを行った。子供たちは、黄色の花を見つけて小学生の生活科の教科書で名前を調べたり、どんぐりを袋いっぱいに拾ったり、様々な様子が見られた。また、園内地図（図１）を利用して、カキの木やシラカシの木などの場所を知らせるため、園児が児童に地図の見方を尋ねたり、書けない文字を聞いたりする姿もあった。

図２

○互いの思いや考えなどを共有し、秋のお宝を見つけるという共通の目的の実現に向けて考えたり協力したりしている姿を評価する。（**④協同性**）
○子どものつぶやきや動きを見取り，「何をしているの」と問いかけて表現を促したり、「素敵な表現だね」と表現したことを価値づけたりする。（**⑤言葉による伝え合い，⑥豊かな感性と表現**）
○自然と秋のお宝で遊びが始まる姿や，きれいだな面白いなと心を動かされている子どもの様子を見取り評価する。（**⑦自然とのかかわり・生命尊重**）

(3) 振り返り

幼稚園の子供たちにとっての学びと活動内容について園内で振り返りを行い、後日、幼小の教員が集まり全体で振り返りを行った。

(4) 「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」の活用について

昨年度作成した「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿の共有シートを用いて、この活動でどの項目が当てはまるのか確認を行った。また、「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」を考慮し、小学校の評価基準（図２）を作成している。

【成果と今後の展望】

(1) 成果

・昨年度までの交流活動を基に、今年度の子供たちの興味・関心、これまでの経験から交流活動のねらいに向けて活動内容を見直し、幼稚園で行うという新しいことにチャレンジできた。

(2) 今後の展望

・「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」をまとめた共有シートを更に意識し、日々の保育につなげていきたい。また、この共有シートも活用しながら教育課程の内容の見直しも行っていきたい。

（42. 高知大学教育学部附属幼稚園）

幼小交流活動 14

視点	2	ステップ	3回	実施時期・回数	１１月・１月・２月頃

近隣の小学校（宗像市立赤間小学校）との交流

【取組の実際】

(1)　福岡教育大学附属幼稚園は，本園から進学する幼児が一番多い，近隣の宗像市立赤間小学校の５年生と年長児の交流を行っている。小学校側の交流の目的は，「新１年生の姿を知り，よりよく関わることができること。相手意識をもち，自分たちで計画・準備・実践をすることができる」，幼稚園側のねらいは，「５年生と遊ぶことを楽しみ，小学校への期待が高まるようにする」である。

福岡教育大学附属幼稚園・宗像市立赤間小学校の交流実施計画

1　ねらい
（小学校）
① 2月の入学説明会に向け，交流を通して新1年生の姿を知り，新1年生とよりよく関わることができる。
② 相手意識をもち，自分たちで計画・準備・実践することができる。
（幼稚園）
○ 5年生と遊ぶことを楽しみ，小学校への期待が高まるようにする。

2　交流日程
第1回目　平成30年10月17日　9：30～11：30
第2回目　平成30年11月6日　9：30～11：30

3　交流の流れ
① はじめの挨拶（全体）
② 交流活動（グループごと）
③ 新1年生から感想（グループごと）
④ 幼稚園の先生から感想（全体）
⑤ おわりの挨拶（全体）

4　クラスの人数の確認
5年生　40人（男子20人　女子20人）
年長　17人（男児8人　女児　9人）

5　小学校から
1回目は関わりの中で，上手くいかない経験をさせて欲しい。1回目の反省を生かして2回目にどのように関わったらいいか，そのような準備が必要なのか考えさせていきたい。

6　幼稚園から
幼児なりに考えたり自分の思いを伝えることもできるので，よく話を聞いて進んだり，見守ったりして欲しい。

(2)　宗像市立赤間小学校との交流の様子

①　１回目は１０月～１１月に行っている。赤間小学校の児童が本園に来て，５年生５～６名と年長児３～４名がグループをつくる。グループごとに自己紹介をしたり，５年生が考えてきてくれた遊び（紙芝居，だるまさんがころんだ，魚釣りゲーム，ペットボトルボーリングなど）で一緒に遊ぶ。最後に児童も幼児も感想を発表する。

②　２回目は１２月～１月頃，本園で行ってる。５年生が１回目の反省をもとに，遊びを計画・準備する。全員で遊ぶ時間をつくったり，全員で体操したりする時間が加わることもある。
　その後グループごとに分かれ，５年生が計画した遊びで遊ぶ。

③　３回目は２月中旬に，幼稚園側が赤間小学校へ見学に行く。学校の施設を見せてもらったり交流した５年生のクラスを訪問したり，１年生の学習の様子を見せてもらう。

(3)　交流後は，小学校，幼稚園の教員同士がその日の姿を振り返って互いに意見を伝え合ったり本園の卒園生が入学後，どのように過ごしているか聞いたり，幼稚園の頃の姿を伝えたりして教師同士の交流も短時間であるが行っている。

【成果と今後の展望】

(1)　成果
児童は新１年生の姿を知ることができ，幼児は小学校への期待を高められた。

(2)　今後の展望
交流活動を生かしたカリキュラムの連携・接続を行っていきたい。

（43. 福岡教育大学附属幼稚園）